

## 第2章 河川整備計画の目標に関する事項

### 第1節 布留飛鳥圏域の概要

#### (1) 圏域の概要

「布留飛鳥圏域」は、図-1に示す範囲のとおり大和川流域の南東部に位置し、奈良市、大和郡山市、天理市、橿原市、桜井市、宇陀市、川西町、三宅町、田原本町、高取町及び明日香村の6市4町1村より構成される。圏域の面積は約231km<sup>2</sup>(県土面積の約6%、大和川水系[奈良県域]の約32%)である。圏域は我が国に農耕文化が始まって以来の歴史、わけても古代史を通じて政治・社会・文化の中核の地として歴史を推し進めて来た地域である。飛鳥の諸京や最初の本格的な都城である藤原京は言うまでもなく、多くの古社寺・古墳・住居および関連遺構・生産遺跡など国際的に著名な遺跡が群集する文化財の宝庫と言うべく、古代日本の中心となった圏域である。

#### ①地勢・地質

東側は奈良盆地の東縁をなす大和高原(標高300~500m)、南側は紀の川(吉野川)との分水嶺である竜門山地(標高500~800m)により囲まれ、北西に向かって沖積平野が開けている。

地質は東南部の山地においては花崗岩、花崗閃緑岩が卓越しており、北西に広がる低平地は沖積層の未固結の礫・砂・粘土層からなっている。

#### ②気候

大和川流域の気候は内陸型を示し、年平均気温は奈良市でみると15℃前後である。また、奈良盆地は昔から「日照り一番、水つき一番」と言われるように、圏域内にある田原本町の年間降水量は約1,250mmで全国平均の約1,830mmを大きく下回っているものの、梅雨期、台風期に集中する豪雨によりこれまでも多くの災害が発生している。

#### ③土地利用・人口

国道は東西に25号、165号、166号、南北に24号、169号が走り、鉄道については近鉄線が大和八木駅を中心に大阪線、天理線、田原本線、橿原線、JRについては桜井線が縦横断している。京阪神地区に近接しているという地理的条件から、圏域の北西部はベッドタウンとして開発が進み市街地が拡大してきた。圏域中央部は田園地帯が広がっているが徐々に市街化が進んでいる。

一方、歴史的文化的遺産が数多く存在し、古都保存法等により周辺の山地や丘陵などと一体となった歴史的風土を保存する目的で地域指定が行われている。特に明日香村の全域において明日香村歴史的風土保存計画が決定されている。

人口については、平成17年度で約23万人であり県人口の約16%が居住している。昭和35年から平成17年までの45年間に約1.7倍に増加しており、これは県全体の人口増加率(約1.8倍)と同程度の伸びとなっている。

#### ④産業

住宅地開発の進展に伴い大規模小売店舗の進出など各種サービス産業の発展が著しい。また、圏域内の自然・歴史的遺産を訪れる観光者を対象とした観光産業も主要な産業の一つとなっている。さらに、都市近郊型農業も盛んである。

伝統的な産業としては天理市のふすまの引き手、桜井市の木材、三輪そうめん、橿原市の家庭薬、靴、三宅町の皮革製品、高取町の家産薬などが挙げられる。

#### ⑤歴史

この圏域はいわば日本国家の誕生と生成の中心となった地域である。弥生・古墳時代の遺跡が数多く分布しており、特に四・五世紀ごろ大王・大豪族を中心に政治的統一が進められ、六・七世紀には大陸文化や渡来人を受け入れつつ、万葉集などにみられるような洗練された、日本文化の原点とも言うべき壮美で豊かな飛鳥・白鳳文化が展開した。その要地・中核をなしたのはこの地域に所在した、諸所に営造された磐余・飛鳥の古京であり、672年遷都の浄御原きよみがはら

宮と694年成立の藤原京である、これらの宮都では710年平城遷都までの約100年間、天皇を中心に貴族官僚たちによって律令制度が作られ、中央集権的政治体制が完成したのである。

こうした歴史的な背景をもとに、古代国家形成時の宮都・古墳・社寺・条里をはじめ多様な古代遺跡・文化財群が存在し、いわば日本及び日本人の原風景を偲ばせる風土を色濃く残している。

圏域内の河川の多くは、古代に中国大陸につながる水上交易の場を果たした大和川本川に流れ出る河川であり、各沿岸周辺を勢力圏にもつ豪族たちによって管理運営されたが、律令体制下では官僚支配に組み込まれていった。中近世には河川周辺の多くが田畑となり、河川は農業用水の供給源となった。現在の圏域内の河川を見ると多数の屈曲部があり、井堰も多く作られている。年間降水量の少ない奈良盆地では川を人工的に屈曲させて、流水線を延長し勾配を緩めるなどして保水能力を高め、各田畑に水がゆきわたるための工事が、領主・農民によって行われた結果と考えられる。そのために土砂の堆積による天井川となり、浸水常襲地帯が各地に見られるようになって、さまざまな治水事業が行われ、水害避難習俗も見られた。

一方近世に入って農業生産が発展し換金作物が多く作られるようになると、木綿・ひしか(干鰯鮮魚肥料)を中心に大阪との水上運搬・舟運が盛行し、大和川本川と派生する圏域内各河川にはそのための川泊(港)が営まれた。

**大和川の歴史:**奈良盆地の大半の河川の水を合流して、府県境の亀の瀬溪谷を経て大阪湾に注ぐ。かつては北流して難波宮を通り淀川に合流していたが、近世中頃に人工によって現在のように堺市近傍に流れ出る河川となった。遣隋使・遣唐使の多くは大和川を下って難波宮に至り、大阪湾から隋唐に至り大陸の文物を招来して帰ったのであり、古代の大和川は国際的な色彩に満ちた外来文化招来の幹線水路とも言うべきものであった。上流の桜井市には、遣隋使小野妹子と隋からの送使裴世清以下12人が難波津を経て来朝し、上陸した川辺と伝える所もある。中近世には大和農村の水補給の源の役割を果たし、商業経済の発展とともに、大消費都市大阪への農業生産物を運び入れる大流通水路ともなった。

**布留川の歴史:**竜王山に源流を發し曲がりくねりながら西流し、石上神宮が鎮座する石上山北麓を出て盆地に入り、やがて大和川本川に注ぐ。万葉集以来古くから石上の枕詞として知られる、フルは魂振(タマフリ)の信仰に関連する詞とみられ、五世紀頃から呪術のともなった水=日の信仰対象の川でもあった。盆地に出たからは何本にも支流が開削され、なかには五世紀後半と考えられる日本書紀履中天皇条に見える「石上渠(うなで)」に当たるかと思われる遺構も知られている。天理市川原城町には泊、船宿の字名が残っているのは、あるいはこの辺まで近世舟運がみられたのかも知れない。

**寺川の歴史:**多武峰から発して桜井市で粟原川と、さらに橿原市に出て米川と合流し、大和川本川に注ぐ。上流にあたる倉橋川は枕詞として和歌の世界で知られる。三宅町石見の辺は条里に沿ってほぼ直行しており、人工的に流路が変更された考えられる。また、近世に入ると同町今里浜には亀の瀬溪谷との間を、物資を運んで往復する70艘ほどの魚梁船(やなぶね)が寄港する河港があり、船問屋が設けられていた物資の一大集散地であった。

**飛鳥川の歴史:**高市郡の高取山辺から出て、明日香村をぬけた辺までが本来の飛鳥川であるが、現在の行政区画ではさらに東北に流れて川西町保田付近で大和川本川に合流するまでを言う。倭京・飛鳥古京と言われる六・七世紀の宮都が多数存在し、古代史の中心地域を流れる川であるから、多くの歴史的な遺跡・遺構が川辺にも見られる、一例をあげれば齊明天皇の飛鳥川原宮や川原寺の名称は、飛鳥川の川原にあったからであろう。当然、万葉歌人の行き来も多く、多数の歌が残されている。歌の中には石橋、打ち橋が見え、またミソギや祈りの川として詠まれていて、信仰の対象でもあった。一方、氾濫を常とする川でもあり、瀬と淵が交互に繰り返す川としても知られ、万葉集以来近世の文学に至っても「飛鳥川」の名は「人

の心かわり」を表す言葉として頻出する。

「上流にあたる南湊の奥には滝があり、清流が流れ、里山に囲まれた森木立があり原始万葉の飛鳥川の雰囲気がある。日本人が本来もっていた暖かく柔らかい心ねを偲ぶことができる日本の原風景がそこにある。」と言われる。

#### ⑥将来像

本圏域の特徴として、交通の要衝としての重要性があげられる。古代においては、奈良盆地の北側に通じる下ツ道、難波(大阪)への横大路が主要な幹線道路として位置していた。このような東西交通軸と南北交通軸の交わる結節点としての役割は現代においても生きており、京都から奈良を南北に縦貫し、和歌山を結ぶ京奈和軸、大阪から奈良を横断し、三重・名古屋を結ぶ南阪名軸が交差する地域である。これらの交通軸は関西国際空港や京阪奈丘陵で開発が進む関西文化学術研究都市の形成などにより、今後、より重要なものとなることから、地域の拠点としての位置づけは一層高まって行くものと言える。

このように本圏域は優れた歴史的文化的遺産を有するとともに、将来にも広域的な基幹交通軸の結節点としての重要な役割を有する地域であることから、古代から続く歴史的文化的遺産を継承し、拠点都市としての都市機能の充実を図り、地域に根付く個性ある産業とくらしを育てていくことが基本となる。

こうした中で河川は、大和川(初瀬川)、寺川、飛鳥川を中心として、歴史的な景観に配慮しながら総合的な治水対策により洪水に対する安全性の確保とともに、潤い・自然・レクリエーション等の場を提供する重要な空間軸として位置づけられている。

またこれからは、地域づくりの様々な場面において、住民との連携・協働による施策の推進が期待されている。

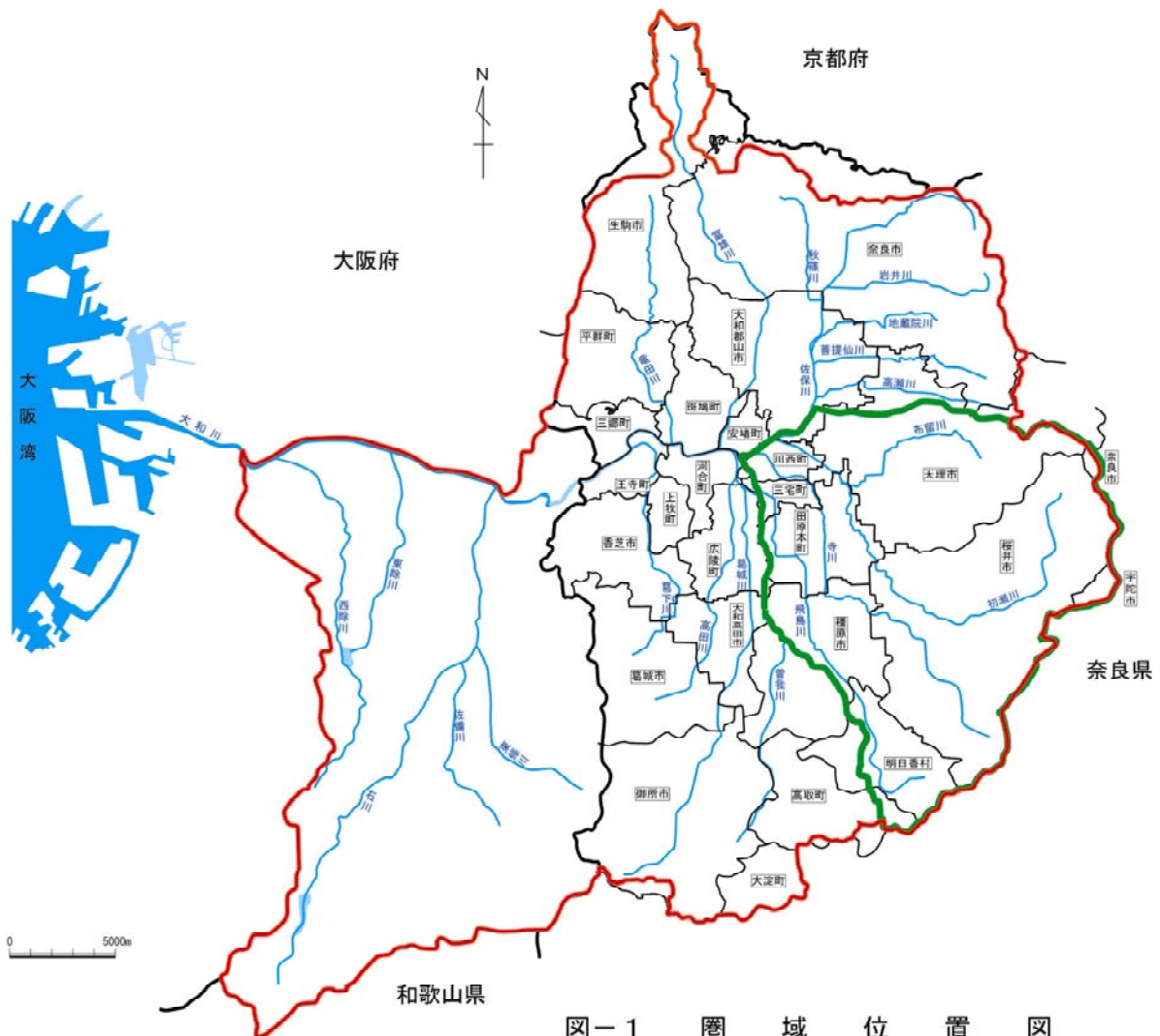
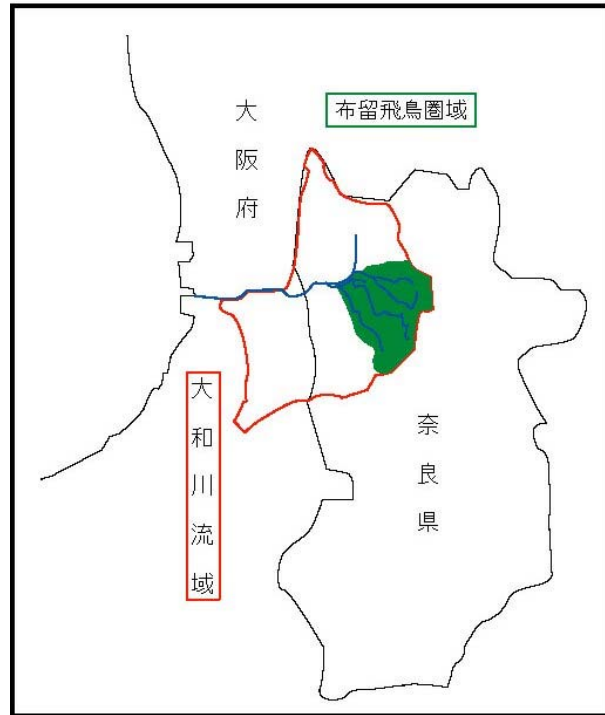


図-1 圏域位置図

## (2) 圏域内河川の概要

一級河川大和川水系に含まれ、県管理河川は全部で50河川(管理延長約198km)である。このうち、主なものでは大和川本川とその一次支川である布留川、寺川及び飛鳥川がある。

大和川は奈良盆地の東に続く笠置山地、大和高原の南部を源とし、山間部を南流し、芹井川、萱森川、口の倉川を合わせて初瀬ダムに注ぐ。その後、倉鳥川、吉隠川、白河川、狛川を合わせ桜井市市街地を西流し、三輪川、纏向川を合わせて北西流し、烏田川、布留川を合わせ奈良盆地の中央で佐保川と合流する。さらに、寺川、飛鳥川、葛下川等各支川を合わせ亀の瀬溪谷を経て大阪湾に注ぐ、流域面積約712km<sup>2</sup>、流路延長約68kmの河川である。このうち河口から川西町吐田(佐保川合流点)までは国管理区間となっている。上流の県管理区間は初瀬川とも呼ばれ、流域面積約112km<sup>2</sup>、流路延長約31kmである。

布留川は奈良盆地の東部山地のほぼ中央に位置する龍王山(標高585.7m)付近を源とし、山間部で長滝川、藤井川とともに天理ダムに注ぐ。その後、山間部を抜けて天理市街を西流し、布留川北流、布留川北々流、布留川南流に分派し、西門川を合わせて大和川に注ぐ、流域面積約53km<sup>2</sup>、流路延長約11kmの河川である。

寺川は奈良盆地の南部にある竜門山地の竜在峠(標高752.5m)東の桜井市鹿路付近を源とし、山間部を北流、多武峰(談山神社)の横を流れ桜井市を貫流する。桜井市川合付近で栗原川を合わせて西流し、橿原市十市町付近で米川を合わせて北流に転じ、かがり川、十二川、かんじょう川を合わせて大和川に注ぐ、流域面積約67km<sup>2</sup>、流路延長約23kmの河川である。

飛鳥川は竜在峠付近を源とし、明日香村栢森、稲渕の谷間を流下し、明日香村祝戸で冬野川を合わせて、その後、明日香村、橿原市を貫流し、屋就川、中の橋川、烏米川、かんでん川、新川を合わせて大和川に注ぐ、流域面積約44km<sup>2</sup>、流路延長約22kmの河川である。

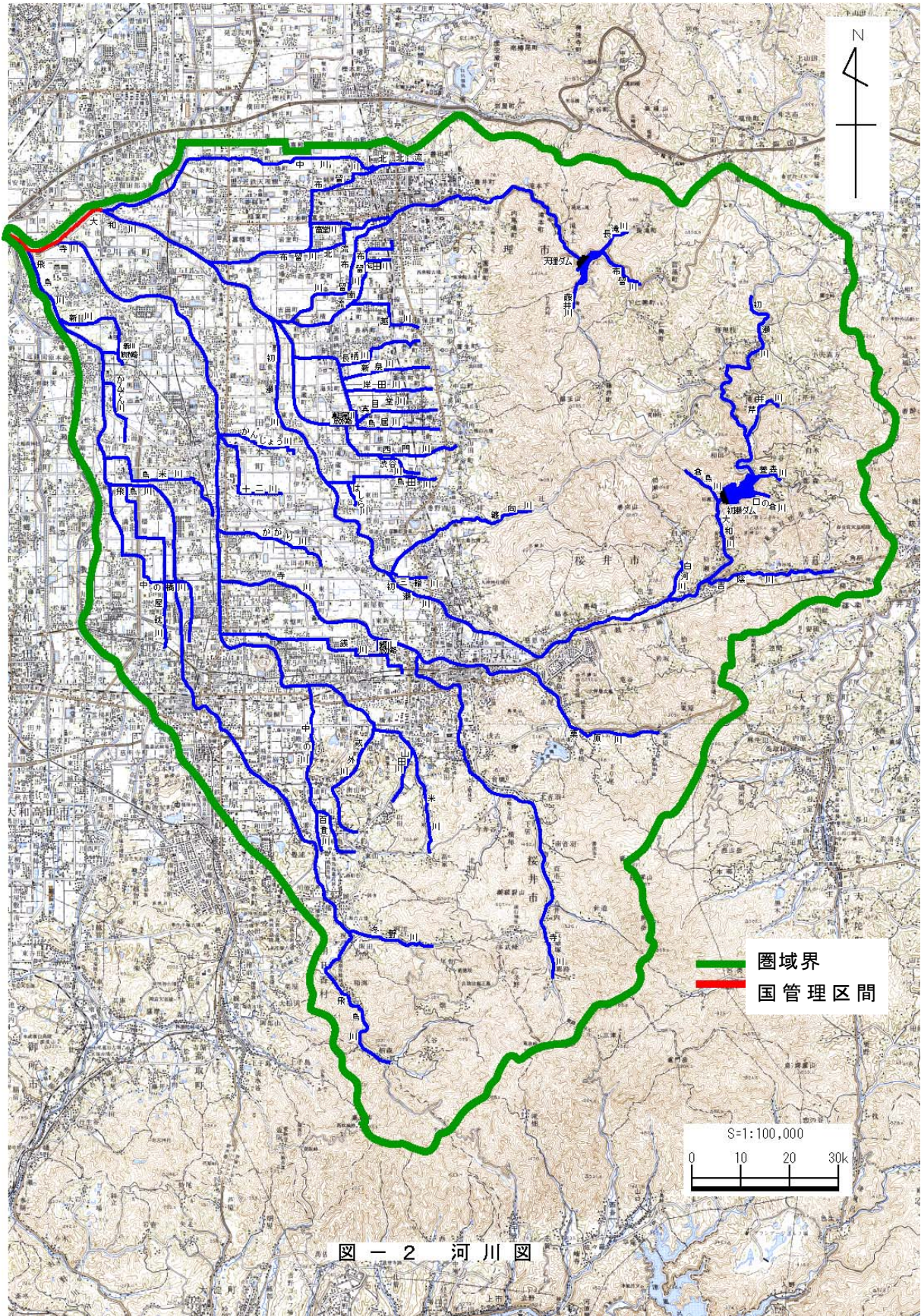


図 - 2 河川図

## 第2節 圏域内河川の整備の現状と課題

### (1) 河川利用及び河川環境の現状と課題

#### ①水利用の状況

河川の流水は、古来からため池とともに主に灌漑用水として利用されている。近年は昭和32年に倉橋ため池が、また、昭和49年より十津川・紀の川土地改良事業による吉野川分水の本格的な運用が始まり、現在は、従前に比べ水不足は改善している。

本圏域の河川のうち、大和川(初瀬川)、寺川、飛鳥川は中世以前に、ほぼ南北に平行するように付け替えられたと考えられている。これは東から西へ傾斜する地形を利用し、標高の高い大和川(初瀬川)で取水した水を灌漑用水に利用しながら標高の低い寺川に排水し、同様に寺川で取水された水は、灌漑用水に利用し飛鳥川に排水されており、用水の効率的な利用を可能にする配列となっている。これらの河川に数多く設けられた井堰と用水路が河川とともに複雑な水路系を構築しているだけでなく、吉野川分水など他水系からの流入経路が組み合わせり、本圏域内の正常流量の把握を困難なものにしている一因となっている。

上水の利用については、圏域内の殆どは奈良県営水道から給水しているが、自己の水源として、桜井市は初瀬ダムと纏向川(桜井市箸中)で取水している。また、天理市が天理ダムで取水している。

大和川(初瀬川)における流況は、昭和60年から平成17年までの近年21年間において、下流部の庵治地点(天理市嘉幡町地内)では平均低水流量 $0.76\text{m}^3/\text{s}$ 、平均濁水流量 $0.43\text{m}^3/\text{s}$ 、上流部の黒崎地点(桜井市慈恩寺地内)では平均低水流量 $0.62\text{m}^3/\text{s}$ 、平均濁水流量 $0.41\text{m}^3/\text{s}$ となっている。

漁業については、大和川(田原本町と桜井市の境界から下流)、寺川(田原本町と橿原市の境界から下流)、飛鳥川(近鉄田原本線橋梁から下流)ではコイ・フナが大和川水域河川漁業協同組合により放流されており、大和川(桜井市粟殿の出口橋から上流)及びその区域にある支川ではアマゴ、アユが初瀬川水域漁業協同組合により放流され内水面漁業に利用されている

なお、大和川水系河川整備基本方針では、流水の正常な機能を維持するために必要な流量を、柏原地点(大阪府柏原市)において、7月から9月は概ね $4\text{m}^3/\text{s}$ 、10月から6月は概ね $6\text{m}^3/\text{s}$ と定めている。

#### ②河川の水質

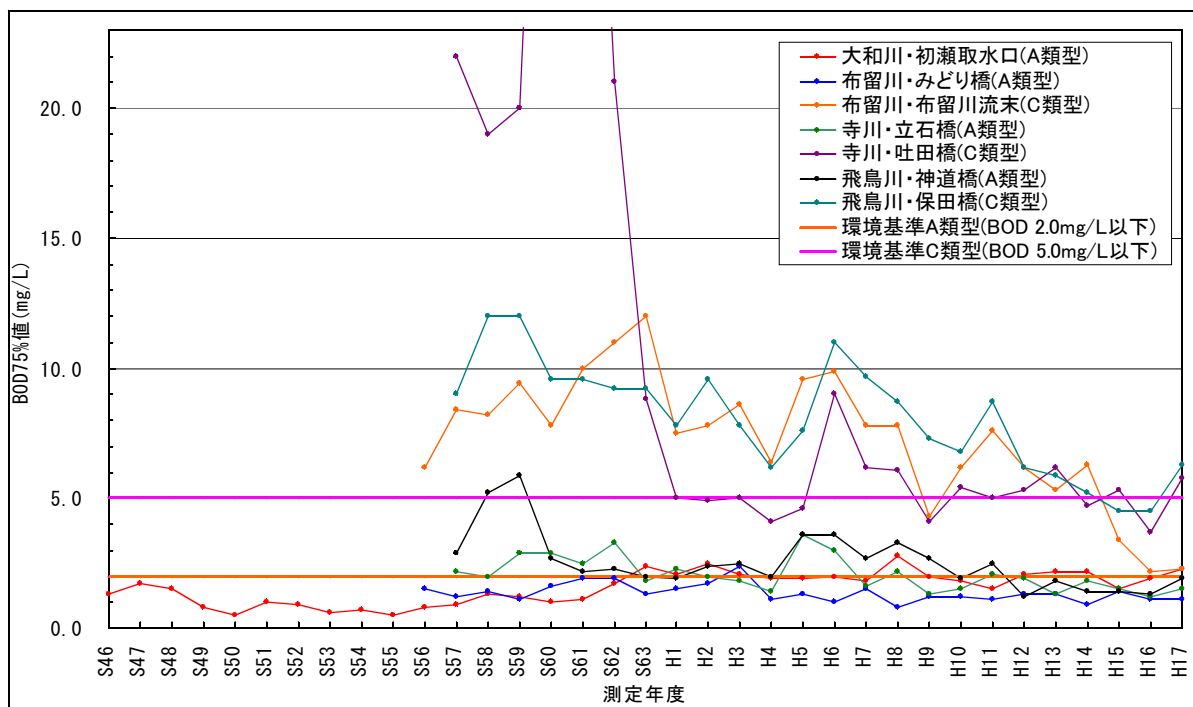
昭和40年頃からの流域の都市化の進展に伴い河川水質の悪化が顕在化しており、本圏域においても、「万葉の清流ルネッサンス」計画に基づき、総合的な水質改善の取り組みを進め、下水道等の整備とあわせ、水質悪化が著しい三輪川、中の橋川において河川直接浄化事業を実施してきた。

布留飛鳥圏域の水質の環境基準は、大和川(初瀬川)、布留川、寺川及び飛鳥川の上流部がA類型( $\text{BOD}2.0\text{mg/L}$ 以下)に、布留川、寺川及び飛鳥川の下流部がC類型( $\text{BOD}5.0\text{mg/L}$ 以下)に指定されている。

環境基準点におけるBOD値は近年改善傾向にあり、特に下流部では大きな改善が見られる。平成16年度には7地点すべての環境基準点において環境基準を満足したものの、環境基準値付近を推移している状況が続いていることから、さらなる改善を図る必要がある。



水質の環境基準点及び指定水域



布留飛鳥圏域の水質（環境基準点におけるBOD75%値の推移）

### ③動植物の状況

近年の動植物の生育状況についてみると、植生については、ヨシ・ツルヨシ・ミゾソバ・ヨモギ・クズ・セイタカアワダチソウ等が広範に確認されている。重要な種としては飛鳥川でカワゲシヤが確認されている。動物では、コイ・オイカワ・ギンブナ・ヌマムツ・カワムツ・カワヨシノボリ等の魚類、スズメ・ツバメ・ドバト・ハシブトガラス・ヒヨドリ等の鳥類、カナヘビ・ミシシippアカミミガメ等の爬虫類、トノサマガエル・ウシガエル等の両生類、タヌキ等の哺乳類が確認されている。重要な種としては、鳥類のカワセミが寺川、飛鳥川、米川で、オオタカ、カワウが寺川、米川で、魚類のメダカが布留川、寺川、飛鳥川、米川で、哺乳類のカヤネズミが寺川でそれぞれ確認されている。しかし、多くの河川及び区間ではその地域本来の動植物の生息環境が損なわれており、河川水辺の国勢調査などにより現状の把握を定期的に行うとともに、水質の改善や多自然川づくりの導入などによる生息環境の改善が必要である。

### ④河川空間の利用

田原本町法貴寺では大和川改修後の旧河川敷を利用し、田原本町と連携し整備を行った「しきの道はせがわ展望公園」、桜井市内の大和川堤防には「金屋河川公園」、県営福祉パークの横を流れる飛鳥川堤防に設置した河川公園などが地域住民の憩いの空間として親しまれている。また、飛鳥川や大和川の堤防には「自転車道」が整備されているほか、布留川、飛鳥川など各河川で「環境学習の場」として“総合的な学習の時間”にも利用されている。

しかしながら、これまでの河川の整備は、洪水を安全かつ速やかに流下させることを目的としたコンクリートブロック等による画一的なものであったため自然環境が損なわれ、さらに、水質が悪化していることもあり、人々が水に親しむには困難な状況が多く見られる。





しきの道はせがわ展望公園



金屋河川公園



県営福祉パーク横公園



飛鳥川(自転車道)

### ⑤流域住民の意向

平成5年に実施した県内主要河川流域住民を対象にしたアンケート調査によれば、全体の約94%の方々が河川に対して高い関心を抱いており、景観的に美しく、水がきれいな河川を望んでおり、釣り・散策・自然観察等に利用したいと考えている。

本圏域では、大和川(初瀬川)(桜井市立第3保育所横)、寺川(桜井、谷地区)において住民と川づくりについての懇談会を設け、住民の意見を反映した川づくりを進めている。



大和川(桜井市立第3保育所横)

## (2) 治水の現状と課題

### ①水害の状況

戦後最大被害を被った昭和57年8月の洪水以降、平成7年7月、平成10年8月と、近年でも被害が発生している。

昭和57年8月の洪水は大和川流域全体に甚大な浸水被害(戦後最大)をもたらした。本圏域でも、田原本町法貴寺で大和川の堤防が決壊するなど、浸水面積約157ha、床上浸水43戸、床下浸水303戸と大きな被害であった。

近年は総合的な治水対策により徐々に浸水被害は軽減しつつあるものの、昭和57年以降も浸水被害が発生している。圏域内における主な浸水被害は表-2に示すとおりである。

主な河川では、大和川流域において平成10年8月(床下浸水38戸、浸水面積0.38ha)、平成11年6月(床上浸水1戸、床下浸水1戸、浸水面積0.02ha)に被害が発生。布留川流域では平成11年9月(床上浸水1戸、床下浸水49戸、1.4ha)に被害が発生。寺川流域では平成10年8月(床上浸水42戸、床下浸水559戸、浸水面積5.48ha)に被害が発生。飛鳥川流域では平成10年8月(床下浸水92戸、浸水面積5.92ha)に被害が発生。中川流域では平成4年8月(床下浸水17戸、浸水面積0.18ha)に被害が発生。米川流域においても平成10年8月(床上浸水4戸、床下浸水102戸、浸水面積1.5ha)に被害が発生している。平成10年8月に発生した寺川の堤防の決壊を除き、浸水原因の多くは、市町村が管理する都市下水路等から水があふれたことや、県及び国管理河川における内水被害等によるものである。

表-2 近年における布留飛鳥圏域の主な被害

洪水生起年月	成 因	浸水被害状況		
		浸水面積(ha)	床上浸水(戸)	床下浸水(戸)
昭和57年 8月	台風10号及び低気圧	156.50	43	303
平成 4年 8月	豪雨	15.85	19	1221
平成 5年 7月	梅雨前線	57.92	2	76
平成 7年 7月	梅雨前線	55.96	22	125
平成 9年 7月	梅雨前線	1.05	0	50
平成10年 8月	梅雨前線	23.65	121	1569
平成11年 6月	梅雨前線	25.78	1	45
平成11年 8月	低気圧	0.87	0	72

出典：平成10年度以前は水害統計 平成11年度は市町村からの報告(河川課調べ)



平成10年8月洪水(田原本町秦庄)



平成7年7月洪水(檀原神宮参道)



平成10年8月洪水(寺川堤防の決壊)

## ②総合的な治水対策の現状と課題

本圏域では、国土交通省、奈良県及び大和川流域24市町村(奈良県内)が連携し、洪水流下型対策と洪水貯留型対策を総合的に推進している。

県管理河川の洪水流下型対策としては、概ね10年に1回程度の確率で発生する降雨の洪水を安全に流下させる能力を有する河道を原則とし、この河道能力を確保するため大和川流域の県管理河川においては約429kmの延長について整備が必要とされている。このうち優先的に整備を進めている河川延長は約276kmで約64%の割合となっている。また、本圏域においては、整備を要する延長は約138kmあり、このうち約66%に相当する約91kmについて優先的に整備を進めている。未だ圏域の治水安全度は低く、これを向上させるため、当面は基幹となる一次支川及び二次支川の重点的な整備を推進する必要がある。洪水流下型対策が完了した区間については、計画規模以下の降雨による洪水に対し、河川から水があふれることによる浸水被害の解消が可能となる。

洪水貯留型対策のうち雨水貯留浸透施設とため池治水利用施設については、大和川流域全体でその計画量に対し平成17年度末時点で約71%の対策が完了となっているが、本圏域に限れば約101%であり、計画量を達成している状況にある。また、防災調整池については流域全体で計画量の約40%を対策しているが、当初想定していたほど市街化が進展していない状況を考慮すれば、現時点の必要量は概ね確保されているものと考えられる。

しかしながら、ダム、遊水地等、河川管理者が設置する洪水貯留型対策の整備量については、計画量の約73%程度しかなく、今後も河川管理者が行う洪水貯留型対策を積極的に推進していく必要がある。

圏域内における近年の浸水被害の多くを占める内水被害については、河床を掘り下げる洪水流下型対策を行うことで、ある程度被害の軽減が可能である。しかしながら、これら内水被害を完全に解消するためには、洪水貯留型対策のさらなる整備や本川を含めた抜本的な河道整備が必要であるため、今後も国土交通省、大和川流域24市町村との連携を強化していくことが重要である。

### 第3節 河川整備計画の目標に関する事項

#### (1) 計画対象区間

本計画の対象区間は大和川水系のうち布留飛鳥圏域にある県管理河川とする。

#### (2) 計画対象期間

本計画の対象期間は、今後、概ね20年とする。

#### (3) 計画の目標に関する事項

##### ①河川環境の整備と保全に関する事項

河川環境の整備と保全については以下の方針によるものとする。

##### i 水がきれいな川づくり

多様な生物が生息し人々が潤いを感じる清流の復活に努める。

##### ii 多様な生物が生息できる川づくり

人と自然の共存を念頭に、自然な川の流れを基本として多様な生物が生息・生育できるような河川環境づくりに努める。

##### iii 人々が水辺に親しめる川づくり

川に興味を持ち、川に近づき、川で遊び、川に親しむことができる河川環境づくりに努める。

##### iv 美しい河川風景づくり

地域住民の意見形成に配慮しながら、各河川の個性を活かした川づくりを進める。

##### ②地域と一体となった川づくりに関する事項

地域の個性を活かし、地域から愛される魅力ある川とするために、以下の方針により、関係機関や地域住民と連携・協働して川づくりを進める。

##### i 川への関心の高揚

河川に関する様々な情報を提供し、行政と住民がそれを共有できるよう努める。

##### ii 住民と連携・協働した川づくり

地域に愛される美しく豊かな公共空間の創造、さらには地域コミュニティの活性化の支援を図る。

##### ③河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項

河川の利用状況を的確に把握し、適切な維持管理を行う。また、流水の正常な機能の維持など健全な水循環の再生を図る。

##### ④洪水による災害の発生の防止又は軽減に関する事項

戦後最大の被害をもたらした昭和57年8月災害の再度災害の発生の防止又は軽減のため、河道断面の拡大を行う洪水流下型対策にあわせて、下流の大阪府との境にある亀の瀬溪谷の流下能力に限界があることから行う洪水貯留型対策など、大和川水系の特性に対応した総合的な治水対策を実施する。

洪水流下型対策としては、本計画期間内では概ね10年に1回程度の確率で発生する降雨の洪水を安全に流下させ、圏域内河川における洪水による災害の発生を防止又は軽減することを原則とする。

洪水貯留型対策としては、現在有している保水機能を積極的に保全又は高めるため、国・市町村及び関係部局との連携を一層深め、遊水地の設置、ため池の治水利用、雨水貯留浸透施設の設置、防災調整池等の設置指導など必要な対策を実施する。

#### (4) 主な河川の整備方針

環境、利水、治水の観点からの整備の目標を前提に、地域住民の連携・協働を促しながら各河川の特徴をふまえた整備を進める。以下に圏域内の主な河川の目標を示す。

##### ①大和川(初瀬川)水系

【環境・景観】大和川(初瀬川)は、古来から奈良盆地に住む人々の生活、文化を支えてきた基幹的な河川である。川沿いには長谷寺、海石榴市、三輪山などの歴史的文化的遺産が点在し、とりわけ桜井市芝付近から初瀬に至る区間は、瑞垣環境保全地区、纏向景観保全地区、出雲・金屋景観保全地区、多武峰・高取景観保全地区に面しているほか、三輪山の辺風致地区、三輪山歴史的風土特別保存地区にも隣接しており、河川の整備を行う際は、環境の保全や回復に配慮しながら進めるとともに有識者の意見を聴き、これらの歴史的文化的遺産や周辺景観に調和した整備を図る。水質については三輪付近は概ね良好であるが、下流の上吐田付近、上流の長谷寺付近では、環境基準を満たしていないことから、今後も地域住民とともに水質改善に努め、生物の生息環境を保全しながら、河川美化啓発活動等を推進し河川環境の改善に努める。

支川の三輪川については浄化施設を適切に維持管理し今後も水質の改善に努めるほか、纏向川、烏田川などの他支川とともに地域住民と協働しながら河川環境の改善に努める。

【利用・利水】川沿いには初瀬ダム湖の親水公園、桜井第3保育所横の親水公園、「金屋河川公園」、「しきの道・はせがわ展望公園」などを整備しており、関係自治体や地域住民と連携し適切な維持管理と利用促進を図る。また、大和川(初瀬川)本川、支川ともに、親水空間の整備を行う際は、地域住民の計画づくりと維持管理への連携・協働を基本とする。さらに、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】佐保川合流点より上流の大和川(初瀬川)本川は大小あわせて29の一級河川を支川として抱えており、流域全体の治水安全度を上げるため、長期的には初瀬ダムまでの区間について河道改修を計画的かつ段階的に進める。



## ②布留川水系

【環境・景観】布留川は上流の山地区間、中流の天理市街地区間、下流の田園区間を流下する河川であり、各区間毎の環境や周辺景観に配慮した整備が必要である。

布留川本川の布留ノ高橋付近から上流については、水質も良好で多様な植生や水生生物等の生息環境が確保されていることから今後もその保全に努める。また、大和青垣国定公園、山の辺風致地区に指定されており、河川の整備を行う際は、環境の保全や回復に配慮するとともに布留ノ高橋や石上神宮などの歴史的文化的遺産や周辺景観と調和した整備を図る。

布留ノ高橋付近から下流区間及び布留川北流、布留川南流をはじめ水系内各支川の水質は概ね良好であるものの、流水の見た目は悪く、今後も地域住民とともに水質改善に努め、生物の生息環境を保全しながら、河川美化啓発活動等を推進し河川環境の改善に努める。また、河川の整備を行う際は周辺景観に配慮しながら進める。

【利用・利水】天理ダム湖には親水公園、布留川と布留川南流の合流点上流には河川公園があり、関係自治体及び地域住民と連携し、これらの適切な維持管理と利用促進を図る。また、親水空間の整備を行う際は、計画的に河川整備を進める布留川北流と布留川南流だけでなく、布留川本川及び各支川についても地域住民の計画づくりと維持管理への連携・協働を基本とする。さらに、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】布留川北流分派点から上流の布留川本川及び、布留川北流については、流域全体の治水安全度を上げるため、長期的には天理ダムまでの区間について河道改修を計画的かつ段階的に進める。布留川北流の河道改修を行うことで、布留川北流分派点から下流の布留川本川については、現況以上に流下能力を向上させることが不要となることから今後は適切な維持管理に努めるものとする。布留川南流については天理市街南部の浸水被害を軽減するために、洪水を安全に流下させる能力が不足する区間について計画的に河道改修を進める。



### ③寺川水系

【環境・景観】寺川は上流では主に山地区間、中流では桜井市、橿原市、田原本町の市街地を、下流では三宅町、川西町の主に田園区間を流下する河川であり、各区間毎の環境・周辺景観に配慮した整備が必要である。

立石橋付近から上流は、その殆どが自然河岸で水域には瀬や淵が見られる。水質も良好で多様な植生や水生生物等の生息環境が確保されていることから今後もその保全に努める。河川の整備を行う際は、談山神社や鳥見山風致地区、鳥見山歴史的風土保存地区の景観と調和した整備に努める。立石橋付近から下流の水質については、環境基準は満たしておらず、流水の見た目も悪い。さらに、これらの区間ではゴミの不法投棄も多く、景観を悪化させていることから地域住民とともに河川環境の改善に努める。また、粟原川、かがり川などの支川においても、生物の生息環境の保全と河川環境の改善に努める。中下流域には自然公園区域や風致地区、歴史的風土保存地区等には指定されていないが、これら河川の整備を行う際は、三輪山など大和青垣国定公園を見渡す周辺景観に配慮しながら進める。

【利用・利水】JR桜井駅南側には地域住民が計画作りから連携・協働した親水空間が整備されているほか、中下流の堤防上には桜並木が整備されている区間が多く、これらの区間では関係自治体や地域住民と連携し適切な維持管理を図る。また、親水空間の整備を行う際は、地域住民の計画づくりと維持管理への連携・協働を基本とする。さらに、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】寺川は大小あわせて11の一級河川を支川として抱えており、流域全体の治水安全度を上げるため下流より計画的に河道改修を進めてきた。今後は、桜井市中心部の浸水被害を軽減するため、洪水を安全に流下させる能力が不足する区間のうち、粟原川合流点までの区間について下流より計画的に河道改修を進めていく。



梅戸橋より上流を望む（川西町梅戸）



八尾井手橋より上流を望む（田原本町阪手）



大門橋より上流を望む（橿原市十市町）



還元橋より上流を望む（桜井市東新堂）



桜井市百市付近より上流を望む

#### ④米川水系

【環境・景観】流域内には磐余風致地区、香久山歴史的風土特別保存地区、香久山風致地区、耳成山歴史的風土特別保存地区、耳成山風致地区があり、河川の整備を行う際は、環境の保全や回復に配慮するとともに有識者等の意見を聴きながら、これらの景観と調和した整備を図る。また、中の川、戒外川などの他支川においても、生物の生息環境の保全と河川環境の改善に努める。

一級河川上流端から下流約2.5kmまでの区間は水質も良好で多様な植生や水生生物等の生息環境が確保されていることから今後もその保全に努める。中下流区間については、流水の見た目も徐々に悪くなっており、今後も地域住民とともに水質改善に努める。

【利用・利水】寺川合流点から銭川合流点にかけての堤防上には桜並木が整備されている区間がある。これらの区間では関係自治体や地域住民と連携し適切な維持管理を図る。また、親水空間の整備を行う際は、地域住民の計画づくりと維持管理への連携・協働を基本とする。さらに、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】米川流域では昭和57年8月、平成4年8月、平成10年8月洪水などに浸水被害が発生しており、これらの被害を早急に軽減するため、洪水を流下する能力が不足している区間のうち、中の川合流点までについて下流より計画的かつ段階的に河道改修を進める。





## ⑤飛鳥川水系

【環境・景観】飛鳥川は万葉集に多く詠まれるなど、古くから人々に親しまれており、川沿いの市町村のうち、とくに明日香村の生活、文化並びに歴史的風土の形成に大きな役割を果たしている。そのため全村域が第1種もしくは第2種歴史的風土保存地区に指定されている明日香村内においては、第3次明日香村整備計画に基づき、歴史的風土、とりわけ自然環境との調和に配慮しつつ、瀬や淵など多様な河川形状を創出し、豊かな自然にふれあい、水と親しむことのできる河川環境等の体験学習や歴史文化の学習の場として、明日香村にふさわしい河川環境の整備を図る。特に、明日香村栢森地区においては、明日香村が進めている地域活性化計画と連携し、地元住民や有識者等の意見をふまえて策定した「神奈備の郷・川づくり計画」に基づき、奥明日香の風土にふさわしい川づくりを行う。橿原市域においては、市の中心である近鉄大和八木駅付近を流下する河川として周辺市街地、町並みと一体となった整備を、また下流の田原本町、三宅町、川西町域では周囲に広がる田園風景と調和した整備を図る。河川の整備を行う際は、環境の保全・回復に配慮する。また中の橋川などの他支川においても、生物の生息環境の保全と河川環境の改善に努める。水質については、神道橋（橿原市小房町）付近から一級河川上流端（明日香村栢森）までの区間については良好であり今後もその保全に努める。中下流区間については見た目も徐々に悪くなり、保田橋（川西町保田）付近では環境基準を満たしていない。さらに、これらの区間ではゴミの不法投棄も多く、景観を悪化させている。今後は、中の橋川浄化施設の適切な維持管理を行うとともに、地域住民とともに水質改善と河川環境の改善に努める。

【利用・利水】川沿いでは、田原本町の県営福祉パーク横と明日香村<sup>いかつち</sup>雷に親水施設（空間）が整備されているほか、中下流の堤防には桜並木が整備されている区間が多く、これらの区間では関係自治体及び地域住民と連携し適切な維持管理を図る。また、親水空間の整備を行う際は、地域住民の計画づくりと維持管理への連携・協働を基本とする。さらに、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】飛鳥川は6支川を有する大和川の1次支川として、流域の治水安全度を向上させることを目的に下流より計画的に河道改修を進めてきた。今後は橿原市を中心とする中和拠点都市地域の浸水被害軽減と、第3次明日香村整備計画に基づく明日香村の生活基盤整備の一環として、大和川本川合流点から明日香村稲渕付近までの区間のうち、洪水を流下する能力が不足している区間について計画的に河道改修を行う。また、明日香村栢森地区においては、「神奈備の郷・川づくり計画」に基づき、洪水調節効果を有する河道改修を行う。



出屋敷橋より下流を望む(三宅町伴堂)



多宮橋より下流を望む(田原本町多)



豊田跨線橋より上流を望む(橿原市上品寺町)



小治田橋より下流を望む(明日香村雷)



神奈備橋より下流を望む(明日香村稲渕)

## ⑥中川水系

【環境・景観】中川は川幅が狭小で、殆どの区間がコンクリート護岸もしくはブロック積み護岸であり植生が少ない。しかし、流水の見た目は良好で、魚類、鳥類の生息環境は確保されていることから、整備を行う際はその保全に努めるとともに植生の回復を図る。また、周辺の田園風景と調和した整備を図る。

【利用・利水】中川の川沿いでは、これまで親水公園等の整備は行われていない。今後は地域住民の必要性を確認した上で、既設護岸を緩斜面化するなど、横断形状を必要に応じ変更することで親水性を高めるよう努める。その際には計画づくりと維持管理への地域住民の連携・協働を基本とする。また、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】大和郡山市八条町地内は川幅が狭小なことから、洪水を流下する能力が著しく不足し浸水被害が頻発している。この区間は家屋が連坦し、河道の拡幅が困難であることから上流部に遊水地を整備し浸水被害の軽減を図る。



## ⑦新川水系

【環境・景観】新川は、上流部、下流部では農地を、中流部では三宅町の市街地を流下する河川である。殆どの区間がブロック積み護岸もしくは石積み護岸であり、また、井堰により湛水している期間が長いこともあり植生は少ない。河川水が滞留しやすいうえに生活雑排水等が流入するため流水の見た目は悪く、今後も地域住民とともに水質改善に努め、生物の生息環境を保全しながら、河川美化啓発活動等を推進し河川環境の改善に努める。また、河川の整備を行う際は周辺の田園風景と調和した整備を図る。

【利用・利水】新川の川沿いでは、これまで親水公園等の整備は行われていない。今後は地域住民の必要性を確認した上で、横断形状や管理用通路を必要に応じ工夫することで親水性を高めるよう努める。その際には計画づくりと維持管理への地域住民の連携・協働を基本とする。また、取水施設や取水量の把握に努め、継続的に水質や水量の把握に努める。

【治水】新川流域では、昭和57年8月、平成7年7月、平成10年8月洪水などに浸水被害が発生しており、これらの被害を早急に軽減するため、洪水を安全に流下させる能力が不足している区間のうち、飛鳥川との合流点から三宅町石見都市下水路合流点までの区間について計画的に河道改修を行う。また、飛鳥川との合流付近には、飛鳥川からの逆流による浸水被害を防止するための樋門を設置する。

